

■対談



ワーク・ライフ・バランスの充実度

仕事の無駄を省いて生産性を高め、自分の生活や将来に投資しよう

●勝間 和代 ・経済評論家／中央大学大学院戦略経営研究科客員教授

●楠見 晴重 ・学長

経済評論家の勝間和代さんはマスメディアで活躍するとともに、勝間塾を主宰し、インターネットでも情報や意見を発信している。その発言は、キャリアや就職を考えるうえで示唆に富んでいる。これから社会に出て仕事をしていくのに、大切なことは何か。

Work-life
Balance

◆中学・高校時代は運動とプログラミングに夢中

楠見 勝間和代先生には、昨年10月に本学社会学部が千里山キャンパスで開催した学術講演会の講師を務めていただきました。今号の「Reed」はキャリア教育と就職をテーマにしておりますので、ぜひお話を伺いたく、ここ関西大学東京センターにお越し願いました。

まず、ご自身のキャリア形成についてお聞かせください。公認会計士の2次試験に19歳という最年少で合格し、在学中から会計士補として仕事をされたそうですが、大学と専門学校、いわゆるダブルスクールで学ばれたのですか。

勝間 公認会計士の旧試験制度では、当時の最年少記録です。大学入学後1年間ほどで試験に受かってしまったので、ダブルスクールの期間はそんなに長くはなかったのです。スカッシュサークルに入っていて、ラケットを担いで専門学校まで通いながら、授業中にうとうと眠ってしまうことも多かったですね(笑)。

私は中学・高校時代から運動部に入っていました。中学ではフェンシング部、高校では馬術部と卓球部に所属していました。そして、昼間はほとんど寝ていました(笑)。どうしてかという、夜中にパソコンで遊び、プログラミングに夢中でしたから。文化祭になると、出し物の脚本を書いたり監督をやったりもしました。

中学から慶應の附属(慶應義塾中等部)に入ったので、通常は大学まで進めますから、勉強であくせくするよりもクラブ活動や自分の趣味みたいなことに熱中できたのです。

楠見 それにしても、最年少で公認会計士試験に合格！何か勉強の秘訣があったのですか。

勝間 大学に入学したときは、さすがに少しは勉強しようかと(笑)。勉強するにもやはり目標が必要だと思って、いろんな資格試験について分析したところ、公認会計士試験が資格取得に要する勉強時間が少なくすむことが分かりました。そこで、在学中に合格した人を探して訪問し、勉強法などのアドバイスを受けました。

私は元来、無駄な努力をすることが嫌いで、努力をするんだったら正しい努力をする方法を学んでおこうと考えます。例えば、卓球部に入るとまず卓球の指導書を5〜6冊買ってきて、ざっと読んでから良い道具を用意して、そこから始めます。

◆論理的思考能力と総合的な知識が大事

勝間 私は高校時代に、実は物理学者になりたかったのです。物理や数学が好き、要するに計算が好きでした。高校レベルの物理や数学はロジックと公式さえ覚えていれば、あとは計算するだけで、勉強時間が圧倒的に少なくいい。歴史など他の科目のように、たくさん記憶する必要はありません。

でも、物理学者になる夢は、姉たちに反対されて破れてしまいました。たまたま数学が得意な自分を生かせる道として、公認会計士の職業しか思い浮かばなかったのです。その試験も、簿記や原価計算などの計算科目の成績が良くて受かったと思っ

ています。

楠見 結果的に、商学部に入り、公認会計士になり、経済評論家になられた。その分野では、数学が好きで論理的思考に優れていることが大事だと思います。実際、文系の学生の中には論理的思考能力に弱い場合があり、逆に理系では歴史や社会のことを勉強していない人が多い。本来はもっとバランスよく学んでいかないといけないのですが、それは我々科学者・研究者にも言えることです。現実には福島原発事故への対応を見ていると、総合的知識というか、あまりにも専門が分化され、全体を見る能力、違う視点からの見方が欠けていたのではないかと気がします。

勝間 やはり災害は起こるものだという前提で、日本の社会システムを組み立てなければいけないということが、最も大きな教訓だったと思います。日本は四季折々の美があって、自然環境に恵まれているのですが、それはすなわち災害が非常に多いことですね。そのリスクに応じたシナリオづくりをしていかねばなりません。

例えば、巨大な堤防を築くのがよいのか、避難訓練に力を入れたほうがよいのかという、ハードウェアとソフトウェアのバランスの問題です。私は被災地で、小さいころにおじいちゃん、おばあちゃんから昔話で津波の恐ろしさを聞かされていたことが津波教育になっていたという話を聞きました。

原発事故に関しては、何よりも健康に被害が及ぶ範囲かどうかという科学的な知識のほうを重視したいと思っています。

◆人気企業よりも、これから伸びる会社を選ぶ

楠見 関西大学ではキャリアセンターおよび各学部・研究科を中心に、学生に対するさまざまな就職支援を行っています。それとともに、教育の面でも、キャリアにつながる授業を拡充しているところです。文系の学生にも数学的な素養や数理解理的なスキルは要るだろうし、理系の学生にも人文・社会科学的な科目がもっと必要です。

例えば、ネットからの情報だけに頼るのではなく、新聞をはじめとする幅広い情報を得て物事を判断する力を身につけてほしい。今の学生は新聞を読む習慣がないものですから、「新聞を読む」という科目を設けました。

さて、学生が就職先を選ぶにあたって、重要な点は何でしょうか。

勝間 私はよく学生さんに、「人気企業に行くな」という話をします。どうしても人気企業に殺到するのですが、人気企業というのはピークがもう過ぎた企業なのです。そこに今から新入社員で行くのは、戦略的には全く正しくないですね。今人気だということは、過去においてピークがあったことの裏返しです。しかも、優秀な人がたくさん集まりますから過当競争になります。人気企業よりも、これから伸びてくる会社を自分の目で見分けることが大事なのです。

楠見 おっしゃる通りで、将来伸びるような会社を選ぶことがポイントになると思います。我々もそのような情報を学生たちに伝える努力をしないとイケません。

■対談

Work-life Balance

勝間 まず、自分の足で歩くことです。できればアルバイトをすればいい。働いてみるのがいちばん確実です。何社か働けば、それが良い企業か悪い企業か分かります。それが無理なら、先輩に話を聞けばいい。何のために先輩がいるのですか。大企業ではないところへ行った先輩の話聞けばいいじゃないですか。現に私が公認会計士試験に受かったのは、在学中に合格した先輩の話聞きに行ったからです。

キャリア教育のときに、「伸びる会社の見抜き方」みたいな教育も必要でしょうね。マクロトレンドでいえば、今だったらアジア中心に海外進出を図っている企業以外に選択肢はないくらいです。それなのに、なぜ国内企業のほうに行ってしまうのが非常に不思議なのです。自分自身がいつでも中国、インド、ベトナムなどに行くつもりで就職企業を選んでほしいですね。

楠見 全くその通りです。しかし、これは関西大学に限らず、海外志向、留学志向の学生が少なくなっているのです。

勝間 逆なんですよ。今こそ留学しなければいけないのに。



勝間 和代 (かつま かずよ)
1968年東京都生まれ。慶應義塾大学商学部卒業、早稲田大学大学院ファイナンス研究科修了。19歳で会計士補の資格を取得、大学在学中から監査法人に勤務。アサー・アンダーセン、マッキンゼー、JPモルガン証券を経て独立。現在、経済評論家、株式会社監査と分析取締役、中央大学大学院戦略経営研究科(ビジネススクール)客員教授、内閣府男女共同参画会議議員。2005年ウォール・ストリート・ジャーナル「世界の最も注目すべき女性50人」に選出。06年エイボン女性大賞受賞。09年世界経済フォーラム(ダボス会議) Young Global Leadersに選出。「勝間和代の日本を変えよう」「断る力」など多数の著書があり、累計発行部数は430万部を超える。

◆マニュアルに頼らず、自分の体験で勝負しよう

楠見 私は1年生に対する講義の中で、大学4年間に短期でもいいから必ず海外へ行きなさいという話をしています。ただ、3年次から就職活動をしなればいけないので、3年次の夏休みごろになると就職のことで頭がいっぱいになって、どうしても海外志向になれないという現実があります。

勝間 それは大企業に行きたいからであって、通年採用しているような企業だったら、いつ海外へ行ってもいいわけですよ。既に日本企業は、中国や韓国などアジアの学生をどんどん雇用しています。

楠見 日本人の学生と中国、韓国の学生では、平均的には外国語運用能力は彼らのほうが優れていることが一因ではないかと思われれます。また、国際化への対応は、外国語が話せることだけではなくて、やはり異文化体験をして、異文化コミュニケーションができることだと思っています。

勝間 私も中学生時代に1カ月間ほど、カリフォルニアでホームステイをしたことが頭に残っていますね。娘にもなるべく行かせるようにしています。

楠見 学生時代の体験ということでは、特に私は理系なので、4年生のときに研究室で同じ釜の飯を食って、徹夜もして、卒業研究に没頭することによって伸びてくる学生に多く接しています。就職の際、学生のそういう面を見てほしいというのが偽

「リスクを取って失敗しろ」ということですね。みんな失敗しながらいかないのですが、迷ったときにはリスクが大きいほうを選ぶ、考えている暇があったらやってみるといふふうになるべく経験をたくさん積んでください。

らざる気持ちです。

勝間 採用側も成長力を見てほしい。そこそこ無難な学生ばかりではなく、多少リスクがあっても伸びそうな人、見どころのある人を探してほしいですね。

実際に、いろんな企業の社長さんがおっしゃるのは、格好をつけるなどということです。面接の際には、当たり障りのないことばかり言うのではなく、素顔の自分で、自分の体験や資質を話して勝負してほしい。こいつは面白そうだなとか、気概があるなと思えば採ると。書類の書き方や面接の受け方ばかり訓練するのはやめてほしいとおっしゃっています。

楠見 たぶん人事担当者から見たら、これはマニュアル通りやっているなど、すぐ分かるのでしょうか。

教育の面でも、キャリアにつながる授業を拡充しているところですよ。文系の学生にも数学的な素養や数理処理的なスキルは要るだろうし、理系の学生にも人文・社会科学の科目がもっと必要です。



楠見 晴重 (くすみ はるしげ)
1953年大阪府生まれ。78年関西大学工学部土木工学科卒業、81年同大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。82年関西大学工学部助手。90～91年英国 Imperial College 留学。関西大学専任講師、助教授を経て、02年教授。07年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に。09年関西大学学長に就任。文部科学省大学設置・学校法人審議会委員、社団法人日本私立大学連盟常務理事、財団法人大学基準協会理事、土木学会フェロー会員。主な共編著書「地環境情報学」、「アジア古都物語 京都一千年の水脈」ほか。

◆「1人当たり・1時間当たりのGDP」を基準に

楠見 関西大学は昔と異なり、女子学生は約40%を占めています。学科によっては70%以上のところもあります。勝間さんは、内閣府の男女共同参画会議のメンバーで、ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)に関しても意見を述べてこられました。

勝間 ワーク・ライフ・バランスとは、要は生産性の向上なのです。仕事の生産性が低いとプライベートの時間を侵食してしまうので、生産性を高くしてワークとライフをバランスさせる。その結果、ますます生産性が向上するというのが基本的なロジックです。だから、生産性が低いまま労働時間を短縮するということは、単なる収入減ですからあり得ないんですよ。

仕事の仕方を見直し、改善を重ねて、価値ある仕事は何なのか、無駄な仕事は何なのかを仕分けして、無駄な仕事を極力しないようにして、その分を自分の生活や将来に投資しようというのが本来の発想なのです。今回の節電対策で、生産性がずいぶん上がったみたいです。実際にやればできるのです。

女性の進出と1時間当たりのGDP(国内総生産)は相関関係が高く、1時間当たりのGDPが低い国は女性進出ができていないのです。なぜかという、長時間労働と育児・家事が両立しないからです。フランスでは平均すると1年間に日本人の3分の2ぐらいしか働いていない。ところが、1人当たりのGDPはほぼ同額です。つまり、その分だけ彼らは休暇を取ったり家族と一緒に食事をしたりして暮らしているのです。フランスのほうが女性は働きやすいわけです。これは北欧の場合も全く同じです。

私は、「1人当たり・1時間当たりのGDP」を政策目標に取り入れることを提案しています。現在、日本は39ドルですが、欧米各国並みの50ドルを目標にするのです。単純にGDPを増やすだけでは達成は難しく、GDPを増やしつつ、労働時間を減らしていかないとできません。この指標は、国全体の生産性・競争力を高めるためにたいへん重要な数値です。なぜなら、ワーク・ライフ・バランスの充実度が、人材開発の充実度に関係してくるからです。

◆普段の快適な生活よりも一回り背伸びして遊ぶ

楠見 勝間さんのように新しい発想で幅広い仕事をするためには、学生時代にどのような訓練をしておけばよいでしょうか。最後に、学生たちへのアドバイスをお願いします。

勝間 自分から好奇心をもって遊んだり学んだりすることが一番だと思います。私は年間100冊以上の本を読み、映画も月に10～20本見えています。旅行も大好きで、よく国内外に出掛けている。

さらにいえば、「リスクを取って失敗しろ」ということですね。みんな失敗しながらいかないのですが、迷ったときにはリスクが大きいほうを選ぶ、考えている暇があったらやってみるといふふうになるべく経験をたくさん積んでください。学生時代の失敗なんて、最悪でもせいぜい留年するぐらいでしょう。自分の普段の快適な生活よりも、一回り背伸びして遊んでほしいと思います。

それから、何か運動をしたほうがいいですね。企業の社長さん方は、たいてい何かの運動をなさっています。私の印象では、身体感覚みたいなものが経営に必須なんだろうなという気がします。

楠見 本日は若い人たちの参考になるお話をしていただきました。どうもありがとうございました。